という編著です。この中で、地域を学ぶということ、それは単に内容として地域の課題とか、地域の歴史とか文化とか、そういう内容面での地域ということだけではなくて共同で解決する、或いは共同で新しい未来志向の地域というものを共有していく、ビジョンを共有していく、そういう創造的な学びが広がっているということで、各地の事例を取り上げて、実践的な分析を複数の執筆者がこの本の中で行っています。地域ということに対する非常に総合的な学習が広がったきっかけは、やはり東日本大震災です。阪神淡路大震災がその前段階となります。そして2000年代に入って少子高齢化という非常に厳しい統計的な未来予測予想が提示されたことから、足元の地域をどうしていくかということが、様々に模索されるようになってきました。

さきほど学校中心社会、教育イコール学校というふうになっている日本の現在の教育観というものをお話ししましたが、国際的に見ると地域での学びの重要性が注目されつつあります。学校教育はフォーマル教育という英語で表現しますが、フォーマルではなくて、ノンフォーマル、岡山ではＥＳＤの会議でこのノンフォーマルという言葉がかなり使われたと思います。ノンフォーマルというのは、非学校的、学校外という意味合い、あるいはフォーマル教育が教育課程に基づいてきちっとその中身が段階的組織的に決まっているということですので、ノンフォーマルは体系だって決められていない、つまり自由な学びの過程ということを意味しています。

そもそも日本の社会教育という言葉は、社会における組織的な教育活動と言われてきたので、まさに社会教育イコールのノンフォーマル教育のことだと私は思っています。その重要性があらためて東日本大震災、そして少子高齢化の日本の地域再生への願いの中で、認識されつつあるという動きをこの本の中で検討しています。

そして、歴史的にも高度成長期に公害などが広がって非常に苦しい思いをする住民の方々が闘ってこられた。先日亡くなられた石牟礼道子さんも水俣で、ずっとこの水俣病の苦悩を日本全体に発信し続けて非常に重要な活動をされた方だと思います。その後、農民の問題であるとか、原発の問題であるとかということで、あらためて抵抗する学びだけではなくて、それを予知したり地域の良さというものを皆で共有していく地元学的な学習もこの地域づくり学習として広がってきたとこの本の中で示しています。

これが、公共の教育機関だけではなくて、民間の住民のグループ、自由なグループ、この岡山では横文字もよく使うようですが、「ステークホルダー」、担い手という意味だと思いますが、その問題に直接関わる当事者というふうに捉えると、このステークホルダーは分かりやすいと思います。例えば、足下の公害問題で苦しむ、その地域の人が当事者になっている。そういう方々の声を他の、実際には公害の問題の危険にさらされていない人も親身に我が事として共有できるようになっていく。これがステークホルダーのネットワークという意味だと思うんです。こうしたところが、地域学習の中で今めざされていて、それを推進するコミュニティーのラーニングのセ

ンター（ＣＬＣ）が世界各国で注目されるようになってきています。この岡山で開催された「ＥＳＤ推進のための公民館―ＣＬＣ国際会議」でも確認されてきていると思います。世界 20 カ国以上、700 人近い方が世界各国から来訪して、それぞれの国のＣＬＣについてお話をされています。

つまり岡山の公民館は、元々が中学区に密着していて、それぞれの地元の問題をしっかり皆で取り組む体制をつくってきたのですが、その公民館活動が地区で終わる、完結する活動ではなくて、この国際的なＣＬＣの展開の流れの中に自分たちを位置づけた。そのこと自体が非常に先進的なことではないか思います。普通公民館は全国的な流れにも位置付いていないし、ましてや国際的な流れにも位置付いていない。自分たちの地域というところでは熱心にやっているけれども。そういうところから、岡山は一歩も二歩も脱却して、非常に大きな視野でこの公民館の存在意義というものを国際連帯の中で捉えようとしている。これは本当に重要な先進的なとりくみであると思います。

（２）グローバルな社会の人類的課題としてのＥＳＤ

そしてこのＥＳＤ、理解するのはなかなか簡単ではないと思うのですが、一言で今、単に一つの国、国家の中での問題ではなく、国境を越えて何処の国民にとっても、何処の地域に住んでいる人にとっても共通な課題となっているということが、この「持続可能な社会の発展をめざす教育活動」ESD）で言われていることです。1980 年代頃から地球環境問題が言われてきています。今回の大雪ももしかすると地球環境問題の一つなのかもしれません。東京だけが大騒ぎして、日本海側が何十倍も苦難な雪との闘いを強いられているところが十分に報道されていません。今朝の朝日新聞の声欄に「なんでメディアは一極集中で東京のことばかり騒ぐのか」という意見がでていました。東京は雪が５センチ降っただけで動かなくなる場所なんです。３メートルも降っている地域の苦難は想像もつかないわけですけれども、まさに今回の大雪も地球環境問題として、地域を越えて共に考えねばならないと思います。

そして、今までお話してきたように地域に格差貧困が広がっていること。一億総中流でみんなそこそこの暮らしをしているというイメージは、今の日本社会にはありません。そして、平和の問題も、はらはらする現実が私達の身近にすでに起きているわけですね。こうしたところを人類的課題としてしっかり考えていかなければ、これはあらためて広島からの発信を真剣に受け止めなければと思いますが、一たび戦争が起きれば、もう地球はない。人類はない。そういうところまで核戦争の危機が迫っているということを認識した時に、やはり足元からのＥＳＤというものを人類の課題として捉えるために、大きな視野と具体的な課題意識をつなげていく思考の豊かさと言いますか、思考の力、そういうものが今問われていると痛感いたします。

ユネスコは戦後ずっと、識字のために国際的に努力してきました。世界に 10 億人の非識字者、つまり文字の読み書きできない人たちがいる。それも東南アジアの女性達が非常にその比率が高いということで、成人教育のためには、まずは識字をしっかり取り組むというのが、学習権保障の内容です。今、国連やユネスコが、識字はもちろん基礎なわけですけれども、より普遍的に教育宣言をして人間らしく生きる権利を実現するための社会、持続可能な社会をどうつくるかという方向に大きく国際機関としての提言の方向性を発展、広げてきています。私たちができることには限りがあるわけですけれども、物事の視野として国境を越えた共通性というとらえ方がしっかりできる。そういう認識能力をもって、国際共同ネットワークを展望しながら足元というものを考えていかなくてはならない。環境問題ではグローカル、という言葉が以前から使われていま

す。グローバルというのは地球全体。ローカルというのは足元のこと。でも、環境問題というのはグローカルということなのだ、ということで、この言葉が環境問題に熱心な方々の専門的なＮＧＯやＮＰＯ、研究者の提言として長いこと使われてきたのですが、それは本当に一人一人の問題なのだということを、あらためて岡山のＥＳＤ世界会議で共通認識されたと思います。

そういう意味で、公民館の運営の担い手も基本的には住民自治に根差す、地域の団体とか利用者団体がまずは中核だと思いますが、併せてこうしたグローカルな視野を公民館運営に反映できるような ＮＰＯであったり国際交流組織であったり、そういうところの声を公民館運営の中に反映させていくような、そうした仕組みというものも非常に重要だと考えます。岡山では、ユネスコも含めてＥＳＤの連絡協議会ができている地区公民館もありますが、そうした新しいタイプの公民館運営のステークホルダー、ネットワークというものが日本の公民館のあり方としても広く問われているのではないでしょうか。

東京は、実はまだまだそこまでいっていないのです。ようやく地域づくりに目を向け 始めたという感じですね。英語は皆さんできるはずなんですが、横文字のＥＳＤは公民館活動にはまだ根を下ろしてきていない中で、岡山は地域づくりを足元で日常的にとりくみながら人類的な課題にチャレンジしている。グローバルな資源というものを、展望しておられるのではないか。それがユネスコ学習都市 という形ですね、それで発信していこうとされている。これは本当に日本の今までの公民館活動にはない新しい一歩を切り拓かれているのではないかと、率直に敬意を表したいと思います。

岡山に来るついでということもあったのですが、私はこのところ何度か広島にも調査に伺っています。広島の公民館は民間の財団に委託されていますので、あまり公民館連絡協議会の組織の中で広島の活動は見えないと思いますが、行ってみて深く感銘を受けていることは、どの公民館も平和学習をしなければいけないという考え方があることです。必ず一館一回は、平和の活動を公民館活動に位置づけて、事業一覧に掲載しています。それはやはり、広島と長崎の歴史でありますし、 その平和の学習を支えている市内の平和関係の団体だけで、150 もの団体がある。これが全て平和資料館とネットワークしているんです。公民館活動もいろんなかたちで媒介をしている。そして、ユネスコ協会や国際 ＮＧＯもこの平和学習と関わって、公民館活動にもネットワークされている。ユネスコ協会の方が公民館関係の運営委員とか館長になることも少なくないようです。広島と岡山、中国地方にふたつのグローバル都市が社会教育の分野で生まれようとしているのかもしれません。広島は国際平和都市の歩みと公民館は連動しています。岡山は国際環境文化都市をめざす公民館活動の活発な都市として、これから注目が集まるにちがいないと期待しています。

３．生態系の保護と持続可能な社会をどう足元から構築するか

（１）ユネスコ「食文化創造都市」鶴岡における食文化の継承と食教育

少し他の地域のとりくみの具体例を紹介したいと思います。これも本の販売で扱っていただいていますが、一昨年に出した『地域文化が若者を育てる』という本です。この第３章の 「人と地域をつなぐ食文化」で山形県庄内地方について述べています。岡山も食文化で一家言をもつ地域だと思いますが、山形県庄内地方の食の都、実はこれがユネスコの文化創造都市なんです。日本で初めて食文化の創造都市に認定されています。

本の表紙の美しい風景、これは庄内の月山が見える日本海の姿ですね。こういうところでの食文化をユネスコ都市に認定させた取り組みです。生態系を保護する持続可能な社会ということは、一体どういう切り口からどのように迫れるのかという問題です。 後半、ご紹介するスローフードは、やはり食文化の国際団体なんですが、食という切り口にはまさに生物多様性そのものに迫る重要な方法だということが運動のミッションとなっています。食というのは人間にとって毎日食べているものですから、人間のエゴでどうにでもなる、どうにも変化してしまう、というものなですね。それをイタリア人の言い方で言うと「人間は生かされている」。先ほどもご挨拶の中のお話がありましたけれども、人間は生物の生態系のなかでも生かされている、決して人間が主人で好き勝手、地球を切り裂いている、そういう存在であってはならないのだというふうに、この食の切り口から、まさにエコロジーというのに行き着いている。このユネスコ鶴岡とイタリアのスローフードと、そういう意味で一番人間にとって、毎日の身近な日常の行為と地球生態系というものが直結する問題であるということを鮮やかに示している実践例と言えると思います。

そもそも鶴岡というところは、先ほどの写真で見たように、非常に美しいところで、海・山・里の大自然、日本の本来の自然はみなそうだと思いますが、そこで昔から培われてきた農業とか漁業の生産の方法があって、特にこの庄内では、在来作物、これが江戸期から、庄内地方全体で150 種類以上伝わっています。焼畑農業が伝統的に継承されている土地柄です。実はこれはイタリアから学生たちがやってきて、実習した農法のひとつなんですね。底引き網、漁師のまかない料理、いろんな食材のおいしさを引き出す料理があって、食文化がとても豊かです。その食文化も行事食であったり、精進料理であったり、郷土料理であったりということで、さまざまな機会に共有し、住民が一緒に食べる食事がいろいろあるという地域です。

2000 年代に食の都という地域政策が山形県庄内総合支庁から出されます。これはもう、経済再生のための政策として打ち出されたことです。山形県庄内地方の人口減少、大きな食料生産基地であるけれども、農家戸数は激減しています。山形・秋田・青森、本当に美しいところですけれども、岡山から阪神につながる地域では考えられない、本当に東北の人口減少の深刻な問題を抱えた地域の一つで、そういう意味では県、自治体を挙げて食というものを切り口にして地域再生をしていこうという、もともとは政策ビジョンとして打ち出されてきたものです。

鶴岡はその中で自治体独自にユネスコ創造都市ネットワークに加盟して、ユネスコ食文化創造都市に認定されるという、これはやはり快挙だと思います。新潟と競ったと聞いています。新潟も本当に食の豊かなところですけれども、色々工夫したことが多分、鶴岡が認められた理由なのではないかと思います。

それで、この認定に至るまでのいろいろな工夫を聞いてみますと、まず立場の違う、食というのは作る人から食べる人までいろんな業界がつながっています。本来はこの生産者・流通・料理人・消費者、みなバラバラです。しかし、この食文化を推進するにあたって、立場の違う様々な人たちが一体になるネットワークが必要だということで、推進協議会ができています。この動きの少し前、1990 年代くらいに、日本の漁業が危ないということで、水産業の研究者の方々が、日本の漁業をはたして 21 世紀に残せるのか、というそういう危機感から提言をしていて、その中に、生産から消費までをつなぐということを主張しています。つまり、魚を捕る人と食べる人が一緒に話し合える関係がないと駄目なのだと。実は漁協とか生協ではそういうことを一緒にやってきているんです。漁協のお母さんたちが商品開発をする。生協のお母さんたちが生魚を購入する立場でいろいろな注文を付ける。そういう関係が出来上がっていたわけですけれども、鶴岡の場合

はそれを地域の単位ですべての関係者が一体になって知恵をしぼりあった。これがすごく大きな力になったと思います。

地域づくりという時に、今の人口減少の中でどこでも頭を抱えているのが雇用の問題です。若者が地元に帰りたい、けれども職が無い。雇用という現実にどう向き合うかということ抜きに地域再生は見通すことができないわけです。鶴岡では、本格的な食ビジネスを起こしていく講座、そしてそこから雇用を創出する。すでに 40 人以上の雇用が実現していますけれども、こういうところで自治体あげてがんばってきたということがあります。

それから、この食文化については、忙しい母親がまず食文化から遠のいて、したがって子どもが全然地元の食文化の良さをわからないまま大きくなってしまっている現実があることも認識されています。このサイクルを断ち切るには、子どもにしっかり地元の食文化の良さを伝えていかなければいけないという考え方から「シェフと子どもたちのプロジェクト」が提案されました。

これは非常に興味深いプロジェクトです。学校給食でも地産地消というとりくみをやっていますが、全地域的な取り組みに広げています。例えば鶴岡市立加茂水族館は年間 70 万人くらい観光客がやってくる人気のクラゲ水族館なんですけれども、ここが学博連携をして、小学校でいろんな魚の稚魚を育てる活動をしています。そして水族館にシェフが来て料理教室を子どもたちのために開くという、水族館の持つパワーをうまく連携させた取り組みになっています。今、鶴岡市はジオトープ、食のミュージアム、つまり庄内全域が食の博物館だ、という方法でまちづくりをしようという非常に大胆な打ち出し方をしています。公民館は社会教育施設ですけれども、図書館・博物館も社会教育施設なんです。この社会教育施設がそれぞれの独自の力を発揮しながら、いかに連携して地域づくりの力にしていくかという一つの例として、この水族館の鶴岡における役割ということがあると思います。

この加茂水族館、実は衰退していてリニューアルもできないでどうしようか、廃館にしようか、というくらい落ち込んでいたようです。それを市民債で資金を集めて、2015 年にリニューアルオープンしました。2017 年に来館者 200 万人を達成しました。つまり年間 70 万人ですね。本当に魅力的な水族館に生まれ変わっています。

それから、食をテーマとする国際交流、これも環境ということを考える時本当に大事だと思うのですが、よその地域の人たちが違った価値観で取り組んでいることと交流できることが非常に重要だと思います。鶴岡はイタリアスローフード協会と提携して、毎年外国人の学生さんたちが、実習にやってきて食文化の実習、酒造り、焼畑農業、いろんな漁師の魚、漬物を実習して「面白い。美味しい、美味しい」と言っています。地元の人はあるのが当たり前で自分の地域がそんなにすごいものを持っているって普通気づかない方が多いのですが、「イタリア人に言われるんじゃよほどすごいんだな」というふうになってくる。こういうことが国際交流の面白さではないかと

思うのですが、様々な取り組みが発展しています。

（２）鶴岡の“食の理想郷”追及を支えるネットワークと次世代育成（食教育）

ネットワークということをご紹介しているのですが、主に役割を果たしている３つの、岡山流に言うとステークホルダーとなると思うんですけれども、第一が農家レストラン。これは本当においしい、そしてたくさんのお客さんがやってくる。日経ランキング１位という農家レストランが何軒かあります。庄内地方全体としてグリーンツーリズムということを打ち出して、そして今、市民ガーデンという取り組みをある農家レストランがやっていて、これは食材生産の体験教育の場にしていきたいという、ここにも新しい学習が生まれています。

もう一つのステークホルダーとして、山形大学農学部在来作物研究会。これは日本でも他に例のない専門家の先進的な研究だそうですけれども、江戸期からの在来作物をずっと研究されていて、その保存のために多方面の関係者が在来作物のおいしさを評価できるようにしようということで、大学の公開講座「おしゃべりな畑」を開催して、在来作物案内人という学部認定資格を出しています。この資格を受けた方たちが、案内人として食の鶴岡を発信するいろんなレポーターになっておられます。

もう一つ大きな事業として、浜文化伝道師。これは県の水産課の資格認定事業なのですが、今 150 人くらい認定されていて、庄内地方の海岸で浜揚げされる魚の文化を料理教室を開いて伝えていく、ということで、料理教室の風景が写真で載っております。

私もあまり言える資格はないのですが、パックに入って、味噌煮になっているようなお魚を買うのが楽でいいんです。でも、この浜文化伝道師の方たちは、魚というもののおいしさを味わうには「一匹丸ごと調理しないとだめだよ」と教室で教えているのです。子どもたちは切り身しか見たことがないので、魚のきれっぱしが海で泳いでいるというふうに思っている。「うわあ、お魚ってこんなの」って感動するそうです。「どうやって泳ぐの」「どうやって食べるの」とか、すごい感動的な質問がいっぱいでてくるんです。そして、この浜文化伝道師の方が調理します。はらわたなどもこうやって料理するとおいしいんだよと、材料すべてを無駄にしない在来の調理法を伝えていく。

日本の水産業が 21 世紀に生き残れるかということを研究者が問題提起した背景には、やはり日本人が限りなく魚を食べなくなっている危機感ですね。結局魚が売れないから漁師の後を継ぐ人がいない。庄内は湾がないので漁業の規模は大きくありません。魚種は多いけれども生産高は低く、漁協の平均年齢はもう 70 歳に近い状況です。農業も同様です。生産の現場はそういう実態になっている。食べる側はコンビニで切って売っている野菜とか、味噌漬けのパックでチンすれば食べられる魚とかですませているので、生産者とつながるなんて遠い話です。最低限、焼き魚ぐらいしようと私も思っているのですが、それで手を切ったりして情けない消費者です。

こういうふうに、立場の違う食材を生産する人々から消費する人々までお互いの悩み苦しみ苦労、そして継承してきた文化、そういうものを共有する共同体ですね。こうしたことが鶴岡の食文化創造都市の認定につながっているということが言えます。料理教室は公民館やコミセンで開かれていますし、男の料理教室みたいなものもたくさん広がっていて、浜文化伝道師と地域住民の学習活動は年間 400 講座くらい開かれている。内陸部でも教室が開かれて、この方達は魚を持って出向いています。東日本大震災の時は浜文化伝道師が 10 人以上、石巻で庄内の魚の炊出し、煮炊き料理を行ったそうです。これもまたお互いの連携として語り草になっています。

（３）イタリアのスローフード協会における「生物多様性」への視野

イタリアのスローフード協会については、4 月刊行予定でまだ本にはなっていないのですがチラシに入ってる編著『＜食といのち＞をひらく女性たち』の 9 章に書きました。女性たちが「食」という領域で歴史的に大きな役割を果たしてきているということに注目した食文化運動史の本です。執筆者も全員女性というユニークな本です。

スローフード協会は、1980 年代半ばにトリノ近郊の小さな町ブラで集まった青年グループが発祥です。ＡＲＣＩという文化レクレ−ションサークルがあり、そこから誕生した「味わう」ということを楽しもうというサークルが出発点です。美味しい食事をみんなで団らんしながら楽しむライフスタイル。どうしてスローフードと名付けられたかというと、イタリアのローマにマクドナルド、ファストフードが進出してきた。「イタリアにファストフードは似合わない。俺たちはスローフードだ」。日本人はマクドナルド大好き人間になっている面がかなりありますけど、イタリアはそれを拒絶する文化があり、数年のうちに国際的な共感を得て、スローフードというかたちで世界に発信されていった。

消費者が生産者と対話することが大事、食品添加物に何があるのかちゃんと勉強する必要性、生産物の環境とか地域のつながりが大事だとか、さまざまな食のとらえ方を主張しながら大規模な食の祭典をおこない、地域支部を広げつつ、1986 年にスローフード協会が誕生して 30 年になります。「すべての人にとってのおいしい、きれい、正しい食への権利、五感で感じるおいしさ、生産・流通・消費過程の環境的持続性、食のネットワークに属するすべての人の尊厳、社会的正義の尊重」ということを掲げていて、今支部がイタリアに 270、会員が 5 万 5 千人の非営利団体です。

このスローフード協会は日本にも組織があり、現在 160 ヵ国、1500 の世界的な地域支部、10 万人の会員、100 万人の支援者が関わるスローフード・インターナショナルの運動を展開しています。短期間に国際グローバル運動になりました。本部の様子は私が撮った写真なのですが、かたつむりがシンボルです。「ゆっくり行こうよ」という感性、これが世界を今動かしているわけですね。

そしてスローフード協会が正規の私立大学を設立しました。団体が設置者で州の支援がある大学で、食科学大学という名称です。自治体の支援を受けて貴族の館を活用して世界で唯一の高等教育で食科学というものを教える学校で、いろいろな学際領域の教科がカリキュラムとなっています。経済学・経営学・社会学・栄養学などなど。幅広い学際的な学習をしていて、学部というのはイタリアの場合 3 年間なのですが、3 年間の間に 15 回国内外での実習。1 回の実習が 1 週間なので 15 週間実習が必修単位になっています。世界中に実習先がありますが、そのひとつに日本の鶴岡が選ばれています。同志社大学、立命館大学とも連携しています。そういったことで日本は彼らから見ても非常に重要な食文化を学べる国になっているということです。

（４）スローフード教育宣言

「スローフード教育宣言」というのが 2010 年にまとめられているのですが、とても深く豊かな教育原理だと思います。五感の教育、つまり理科で生物を学ぶ、体育で保健で体の仕組みを学んで、家庭科で栄養を学ぶ。ばらばらの知識では「食」は分からない。「食」というものは五感で感じるものなのだというのが、イタリア人らしい主張です。

それでこの五感で感じる教育を行うために、スローフード協会が全国に地域菜園と学校菜園を推進して、今イタリア国内に500箇所くらい設置されています。そしてもうひとつ重要なのが世界の生物多様性を守ろうという運動です。生物多様性が保全されている地域としてアフリカに注目して、アフリカに1万の菜園をという世界的なボランティア運動をしています。今3500の菜園がアフリカにすでに実現しているんです。それこそ国連やユネスコの支援を受けて資金も調達しながら作られている。

この菜園の中で何を子ども達は五感で学ぶのかということが、この14の項目にまとめられています。とても感動する文章で、ゴチになっているところは元々太字で強調されている原文です。私の本にも掲載しましたが、ここでご紹介したいと思います。

① **喜び**であり、楽しい共生の機会であり、感性豊かに軽快に生きること。
② **ゆっくり**という価値を教え、自他のリズムを尊重する。
③ 為すことを学ぶ。直接の**経験**は学習を育み、強める。
④ 文化、知識、能力、見方の**多様性**を評価する。
⑤ 必要性を認識し、各自の興味や**動機**を刺激する。
⑥ 教科学習と多様な実態を関連付け、**総合性**のなかで諸課題にむきあう。
⑦ 理解し、疑問をもつ**時間**をとり、自分の見方を掘り下げる。
⑧ 対話し、自由に意見を述べ、**協力**し、相互に傾聴しながら**参加**を励ます。
⑨ **認知、経験、情緒、感情**の次元を巻き込んだ内面的過程である。
⑩ 地域にねざす**文脈**で記憶、地域の知と文化を評価することで自らを育くむ。
⑪ **共同体**の意識を強め地域のネットワークを支える。
⑫ 自分の役割、行動について**自覚**を深める。
⑬ **好奇心**をかきたて、洞察力と**批判精神**を鍛える。
⑭ より責任ある新しい思考と態度を生みだし、変革を推進する。

⑩で述べていることですが、それぞれの地域の固有の文化的な意味・意義がしっかり分かるということ、この記憶ということを非常に強調していることが印象的です。記憶ということは、つまり伝承ということです。このスローフードの科学の中で文化人類学、日本でいう民俗学ですけれども、すごく重視されていて在来作物のお百姓さんの江戸時代からの製法を記録して聞き取ってそれをちゃんとカタログにまとめている。そういう記憶と収集の活動がこの分野で大変重視されているんです。

この宣言を書いたのは小学校の女性の教員が中心です。イタリアの小学校は8〜9割は女性の先生なんですが、その方たちの中の委員会で実際の菜園の実践を基にしてこれがまとめられました。訳は私の訳なので曖昧かもしれないのですが、このような感性と知性、理性と参加とお互いのつながりを重視した学習がこの食ということをめぐってイタリア全土で進んでいる。世界に広がろうとしていることが伝わってくると思います。

４．ＥＳＤの推進から見えてくる地平

まとめに入りたいと思います。こんなふうな事例も含めて岡山でＥＳＤということを大きな目標に据えたという公民館の活動の重要な一歩について、私なりに評価しながらお話しをさせていただきました。そこから今後見えてくる展望をどんなふうに考えていったらいいのか。分科会に向けての問題の投げかけにもなることですが、３点まとめとして申し上げたいと思います。

まず第一に、ローカルな地域の現実。これはあくまでも基本的なことだと思うのですが､そこで子どもから高齢者まで､多世代ということを申し上げてきたわけですけれども、体験というものをいろいろな年齢層で共有するということが基本的なＥＳＤの学習として可能であるし、しなくてはならないということだと思います。足元の地域資源、これは民族であったり生態系であったり、産業、暮らし、文化、人の育ち、いろんな地域独自のものがあると思いますが、そのこと自体を学習の材料にする。つまり教科書ではないんです。教科書的な知識ではなくてお互いにフィールドワークをしたり、語り合ったりしてはじめてそれが出てくるということかと思うのですが、それによって豊かな生き方を共有していくという学び、地域に根差した学びが大切だと思います。

合わせて多様性と多文化性という点です。国際交流の重要性ということもいろんな形で感じられると思いますが､今ここの地域に在住している方々､あるいはよそから交流でやってくる方々。あるいは自分たちがよそに行って経験する、そういうふうなダイナミックな交流を作っていくことがローカルからグローカルへという方向性の学びを促すと思います。

そして第二に、グローカルな視野で一緒に討論する力が若者の未来を拓くということです。今日は、フォーマルな学校教育に対して、ノンフォーマル、地域社会の学習というものが若者を育て、子ども育てには欠かせないとことをお話ししました。高度成長期まで、40 年くらい前までは伝統的なコミュニティの中で青年団、若者組というのは決定的な存在感、そして決定権を持っていました。何かを地元でやろうとしたときに青年団がウンと言ってくれないとその地域が動かないという時代があったわけです。青年団がよしやろうということで祭りが活発になったとか、新しい取り組みが始まったという地域の歴史があるわけですけれども、そういうふうな将来を責任もって担う自覚をもった若者世代というその存在の形をどう地域社会に継承していくのかということが、いま日本の社会構造全体のなかで問われている非常に大きな問題です。

学校化された社会の中では、若者は結局序列化されてしまいます。狭い物差しで序列化されています。テストの成績とか就職の活動で要領よくふるまえるかどうかとか、そういうことで若者は自信を失ったりしているわけですが、若者の持っている力ってそんなことで評価できるものではないと思います。学校化された社会に入っている若者と、地元でいろいろな事をやっている若者との交流が減ってしまったことも問題です。そういう意味では若者世代の中での連帯感という

か、一体感というか、そういうところも課題だと思います。

自己決定権と社会的有用感。心理学の言葉ですけれども、現代の若者の課題です。今の若者世代は、自分は社会のなかで役立つのかなあ、役立たないつまらない人間だなあ、と思ってしまっている若者が非常に多いんです。それは先ほど言ったように、すごく狭い物差しで測られているからなんだと思います。そうではなくて、「君のこういうところはこういう形ですごく力になるんだよ」と言われることで見違えるほどの若者の元気とかパワーが出てくる。そういう経験を学校ではやっぱり与えられないわけです。学校は評価の基準が決まっていますから。

私は読売教育賞の審査員をしているんですけれども、今年大阪の堺の工業高校の夜間課程の先生の報告が地域社会教育部門の最優秀賞になりました。もう本当に社会的有用感のない若者たちがこの夜間課程では大半なのですが、先生たちの努力で夜間高校の生徒たちがまちのなかで活躍する場所を作った。小学生の就業体験のアドバイザーみたいなことを高校生がする。そして職人さんからモノ作りを学ぶ。それによって鍛えられた姿が描かれていて素晴らしい報告です。ネットからダウンロードできますので是非読んでいただきたいと思います。

自己決定権はもちろんなのですが、社会的有用感ということを意識した若者の未来に向けての力をいかに育むかという課題、これはやはりグローカルという点と、学校ではできないノンフォーマルな社会教育の力ということで注目すべき方向性ではないかと思います。公民館であればいろんな若者の活躍できる場面を作ることができるわけですね。その場面に来てもらうために学校の先生ともしっかり話し合う。場合によってはボランティアの内申評価が高くなる。さきほど取り上げた本の中でも飯田の人形劇のとりくみを紹介していますが、飯田の人形劇フェスティバルでボランティアを高校生から募集しているんです。「なんでボランティアやることになったの」と聞くと「内申点が上がるからだよ」というわけです。これでいいんですね。やってみたら面白いことといっぱいあるんだ、もうやめられなくなってるっていう。そういうふうにして社会とあらためて繋がるきっかけをもつことが重要です。

第三に、国際環境文化都市としてのまちづくりということです。岡山はおそらくそれをめざしておられるだろうと思いますが、国際都市となるための条件というものがあると私は思います。それは外国人がきておもしろいと思うということなんですけれども、それは地域からの発信力と表現力だと思います。あるいは何かが媒介をして発信し交流できる。鶴岡の例もその一つだと思いますし、その国際都市の存在を支えている多様な団体、ボランティアもそうであると思います。特に若者の場合で言うと職業の選択とか、場合によっては起業の力とか、そういうところも若者は学び取っていきますので、国際交流というのは非常に重要だと思います。価値観とか知識のレベルだけではなくて、自分はどういう場所でどういうふうに生きていくかという、時には経済的な展望を含めてということですけれども、そういうふうなところも国際的な交流の中で様々なきっかけや関係性を生み出すことができるのではないかと思います。

鶴岡も、国際交流都市として発信して、料理人がパリへ行って料理作って見せてということだけでもすごい経験になります。飯田も公民館が中心となって人形劇フェスタを 40 年続けてきました。世界各国から人形劇団がやってきて人形劇の国際

交流都市になっているわけです。来週私は飯田の公民館大会第 55 回へ人形劇 40 年の歩みと公民館の役割についてお話しすることになっておりますけれども、国際的な劇団がたくさん飯田にやってくることで、たとえば英語のボランティア活動とか、ガイドさんとか、ホームページとか、音響とかいろんな分野で若者の力が国際水準でよしやろうということになっていくんです。舞台を広げるということの意味が非常に実感できます。

以上３つのまとめを問題提起させていただきました。これに尽きるものではないと思いますけれども、ＥＳＤというものにこだわって新しい一歩を踏み出していくいくつかのポイントになるようなことを、午後の分科会でも皆さんで話し合って、積み重ねられている実践の意味とその実践の持つ未来思考的な公民館にしていくという方向性を共有することが重要だと思います。ぜひ 37 館の岡山の公民館活動の実績を将来につなげ、日本はもちろん国際社会に発信していただきたいということを、これは日本の社会教育の発展のためにもお願いしたいと思っています。

長時間ご清聴いただいてありがとうございました。